

# チマルパイン作品の執筆時期をめぐって

篠原 愛人

## [要約]

本稿ではチマルパインの「史的回顧」、『日記』および『歴史報告書』を、作品中の最新年号・参考資料・共通事項などを比較し、それぞれの執筆時期や前後関係を明らかにして、執筆目的を探る。

『第七』は1629年脱稿が定説とされるが、これは原稿を見直した年で、執筆は1607年には始まり、21年以降も書き継がれた。また「史的回顧」の原案は『日記』や『第七』より前に作成され、1609年に『日記』に組み込まれた。最初期の「史的回顧」や『日記』はアステカの都テノチティランの視点からの歴史であるが、これは参照できた資料の性質による。14歳で都に出たチマルパインは写字生をしながら、周囲にあったキリスト教関係の書物やテノチティランの歴史書から知識を身につけたからである。

1606年、郷土史家だった父が亡くなると、チマルパインはチャルコ地方の歴史資料を集め、写本を取り始める。1611年までに得た郷土史資料を読み、彼の歴史観にも変化が現れる。彼の旧来の歴史観は、天地創造から1608年までの歴史年表である「史的回顧」に代表される、キリスト教的普遍史とアステカ中心の歴史であった。そこに郷土チャルコの視点も取り入れ、かつ単なる郷土史の枠に留まらない視野の広い歴史へ変わろうとする。「史的回顧」がその転換軸の始点とすれば、『日記』の1613年はもう1つの節目である。この年、自らに「ドン」という敬称をつけた記名記事が4本ある。これは郷土史研究を経て、自分自身を見る目が変わった表れである。

## はじめに

アステカ王国が征服されて半世紀余りを経た 1579 年、かつてその都だったテノチティトラン（現メキシコ市）の南東 40km、チャルコ地方のツァクワルティトラン・テナンコで 1 人の先住民が誕生した。彼の家は地元貴族層の末端に近く、代々この町の歴史を保管し、書き足してきた。14 歳でメキシコ市に出た彼は、同市南東端にあるサンアントニオ・アバー教会で写字生や下働きを始め、そこが四半世紀以上の間、彼の生活・活動の拠点となる。上京するまでに実家や地元の教会でナワトル語とスペイン語の読み書きは身に付けていたであろう。親が保管していた絵文書を読み聞かされていたかもしれない。だが、地方の小都市で 14 歳までに得た知識は質も量もあまり大したものではなかったはずだ。それでもサンアントニオ・アバー教会で写本をとる作業をとおして知識と情報を増やし、ついには 8 つの『歴史報告書 *Relaciones históricas*』(以下、『第一』、『第八』などと略す)、『クルワカン市創設に関する簡潔な覚書 *Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacan*』(以下、『覚書』と略す) や『日記 *Diario*』と通称される同時代史などを書き上げる。いずれもアルファベット表記のナワトル語(一部スペイン語)である。チマルパインの手稿は 19 世紀末まで出版されることはなかったが、17 世紀後半にはメキシコ市の知識人の知るところとなっていた<sup>(1)</sup>。

表 1 チマルパイン主要作品と写本<sup>(2)</sup>

作品名	所蔵	フォリオ	取り扱い年	主な内容
『第一』	BnF	1r~7v	...	天地創造、アダムとイブ; 古典著述家の引用
『第二』	BnF	9r~14v	1~50	聖書年代、メソアメリカ暦、チチメカ到来、四大陸
『覚書』	BnF	15r~67v	670~1299	メキシコ盆地主要都市・民族の歴史
『第三』	BnF	68r~115v	1063~1520	アストララン出立からコルテス到着までのメシーカ史
『第四』	BnF	116r~122v	50~1241	チャルコ地方の人々の起源、移住の歴史
『第五』	BnF	123r~138v	1269~1334	チャルコ地方テナンコの歴史
『第六』	BnF	139r~144v	1257~1612	チャルコ地方に定住した人々の概略史
『第七』	BnF	145r~224v	1272~1591	チャルコ地方トラルマナルコの歴史
『第八』	BnF	225r~272v	...	チャルコ地方の歴史資料(年代記ではない)
『日記』	BNAH	17r~18v	1577~1589	同時代史(主にメキシコ市と周辺での出来事)
『日記』	BnF*	p.1~p.286	1589~1615	同上
『メシカコトル』	INAH	18r~63r	1064~1579	アルバラード・テソソモク著作の写本
『C.Chimal.』	INAH	3er. vol.	...	「巻頭文書」(スペイン語)、上記書を含む小品集
『征服記』	NLCh	1r~172r	1485~1539	ロベス・デ・ゴマラ『メキシコ征服記』写本

BnF: フランス国立図書館、メキシコ手稿 # 74 (BnF\*: 同、メキシコ手稿 # 220)

BNAH: メキシコ国立人類学歴史学図書館 # 256B INAH: 同博物館

NLCh: シカゴ、ニューベリー図書館 C.Chimal.: 『コディセ・チマルパイン』

筆者はこれまで4度、本紀要でチマルパインの『日記』について発表する機会を得た<sup>(3)</sup>。その原点は、『日記』の1608年の記事の最後に唐突に挿入された、年表のような部分(以下「史的回顧」と呼ぶ)であった。全体で286ページある『日記』で、「史的回顧」は43ページ(15%強)を占める。天地創造から始まる年表がなぜここに挿入されたのか。作品全体でどのような意味をもつのか。これまでその謎に迫るため、『日記』で使われたキーワードに着目し、あるいは加筆・修正・抹消部分などからアプローチを試みてきたが、明確な結論を得るに至らなかった。それはひとつには、彼の作品の執筆年が定まらず、どの作品が他のどの作品を参照したのか、関係性が不明な点にある。具体的な執筆年を打ち出せない作品が多いものの、本稿ではせめて一部作品の前後関係が分かるようにしたい。そうしないと、彼の執筆意図さえ曖昧になるからである。

表2 チマルパイン『日記』の取り扱い範囲

年号	M 暦	齢	日付	fol./p.	数	年号	M 暦	齢	日付	p.	数
1577	7 家		1.31.~3 末	17r	...	97	1 家	18	1.20.~12.7.	19~21	3
78	8 兎		月日不明		...	98	2 兎	19	2.4.~12.6.	21~23	3
79	9 葦	0	不明~12.25.		...	99	3 葦	20	2.10.~9.9.	23~24	2
80	10 石	1	10.9.		...	1600	4 石	21	1 上~12.14.	24~27	4
81	11 家	2	記述なし		...	1601	5 家	22	1~5.6.	27~31	5
82	12 兎	3	7.22.~12.31.	17v	...	1602	6 兎	23	4.25.~9	31	1
83	13 葦	4	3~6.29.		...	1603	7 葦	24	4.20.~10.26.	32~33	2
84	1 石	5	記述なし	18r	...	1604	8 石	25	1.6.~12 末	33~39	7
85	2 家	6	1.20.~11.17.		...	1605	9 家	26	1~12.8.	39~44	6
86	3 兎	7	1.19.~6.11.	18v	...	1606	10 兎	27	1~12.6.	44~49	6
87	4 葦	8	記述なし		...	1607	11 葦	28	3~12	49~63	15
88	5 石	9	10.19.		...	1608	12 石	29	1 初~10	63~72	10
89	6 家	10	4.10.~12.30.	1	...	...			史的回顧	72~116	43
90	7 兎	11	1.1.~10.14.	2	...	1609	13 家	30	1.1.~11.30.	116~123	8
91	8 葦	12	2.4.~12.24.	2~4	3	1610	1 兎	31	1.1.~12.16.	123~136	14
92	9 石	13	1.21.~10.12.	4~6	3	1611	2 葦	32	1.1.~12.19.	136~160	15

93	10 家	14	3.28.~10.5.	6~9	4	1612	3 石	33	1.1.~12.28.	160~198	39
94	11 兎	15	1.3.~9.11.	10~14	5	1613	4 家	34	1.1.~11.30.	199~238	40
95	12 葦	16	1.28.~12.31.	14~16	3	1614	5 兎	35	1.1.~12.16.	238~266	29
96	13 石	17	4.2.~12.24.	16~19	4	1615	6 葦	36	1~10.14.	267~282	16

M 暦：メソアメリカ暦（1~13 の数字と 4 種の記号[葦・石・家・兎]を組合せた 52 年を 1 周期とする）

齢：チマルパインの年齢

日付け：それぞれの年で記述のある最初の日と最後の日

fol./p.：BNAH はフォリオ、BnF# 220 はページ

数：各年のページ数

## §I 執筆時期の根拠

チマルパイン作品が執筆されたプロセスについては、これまでも仮説が出され、あまり疑問視されることなく定説化している。それぞれの根拠は以下の(a)なのだが、首を傾げる点もある。そこでまず定説を検証し、新たに執筆時期の根拠となる要素を検証していく。その要素を (a)最新年号 (b)参考資料 (c)共通記事 (d)その他の 4 つに分ける。

(a)の最新年号とは、作品中に「今年〇〇年」などとして出てくる年号の中で最も新しい年をいう。これを「絶対年代」と呼ぶ研究者もいるが、後述するように必ずしも「絶対的」ではない。(b)はチマルパインが参照・引用した資料で、資料が特定できれば、その執筆(出版)年から前後関係が浮かび上がる。(c)の共通記事はチマルパインの複数の作品で扱われた同じ出来事のこと、記事間の微妙な差異から前後関係を知る手掛かりになりうる。また重複部分の多少で、作品間の関係性も浮かび上がる。(d)のその他は、主に登場人物の没年や離着任の日付けなどで、これも作品の執筆時期を知る手掛かりになる。

### §I - (a) 最新年号

最も広く受け入れられている説は『第六』、『第八』、『第七』、『覚書』がそれぞれ 1612 年、1620 年、1629 年、1631 年に執筆されたという説である<sup>(4)</sup>。

『第六』は 6 葉と短い、扱われた期間(1261~1612 年)は長く、何かの資料の読書ノートという印象を受ける。最後の 2 葉半はそれまでの年代記的記述を止め、チャルコ地方パノワヤン領主クワウセセウツインの女系子孫を扱っている。テーマが切り替わる部分でも字体やインクの色に違いは見られず、後から加筆されたものではない。ただ 1 カ所だけ、明らかに後から書き加えられた部分がある。唯一の男子(庶子)の孫の名前までは周りとは違くないが、段落末のスペースに「1613 年 6 月 20 日、日曜日に亡くなった」と、他より濃い色で加筆されている<sup>(5)</sup>。本文を書いた後、見直しが行われた証左でもある。

『第八』では本文中に 3 度も 1620 年が出ており、その 1 つに「26 年以上もサンアントニオ・アバー教会でお世話になって来た」<sup>(6)</sup>とある。『日記』には 1593 年 10 月 5 日からお

仕えるため同教会に入ったとあり、年数に間違いがないことも確認できるため、少なくとも前半部はその年に書かれたと考えてよい。

『覚書』の終わり近くで、1286年の話をしている fol. 60v に続く数葉が欠落し、現存する次のフォリオに「1631年」が出てくる。

...年に14年を加えた時、そこへ着くところだった。上で述べた1631年にはドン・ディエゴ・ホセ・エルナンデスとその弟ドン・クリストバル・デ・カスタニェダが亡くなった。どちらも先に名を挙げたウエウエ・ツイウトラカウキという、テクワニパン・アマケメカンに來たツォンパワカテクトリの8代目の孫である<sup>(7)</sup>。

この後1295年の話になり、1631年の話だけ前後とずれているため、この10行の文は前後と何の脈絡もなさそうに思える。引用文中のエルナンデスとカスタニェダはチマルパインの母方の叔父で、故郷の歴史書を本来なら継承すべき兄弟であった。そしてツイウトラカウキはチマルパインと2人の叔父にとって大祖先にあたり、他の『歴史報告書』にも登場する<sup>(8)</sup>。直前の数葉が欠落しており脈絡が分かりにくいだが、どうやらチマルパインお得意の脱線らしい。彼は特に王族の子孫の話になると情報を次々と盛り込む癖がある<sup>(9)</sup>。字体やインクの色も後続の1295年の部分と変わりなく、本文中であり、後からの加筆ではないことから、『覚書』の少なくとも最後の方は1631年に書かれたと見てよい。

『第七』に出てくる1629年は、同書の fol.5r の上部余白に後から加筆されたものである。それまで1つだった言語がトラパラン・ノノワルコという場所で変化したと昔の絵文書にあるものの、聖書のバベルの塔の話と同列に扱えないと自説を展開している。その後、「(1272年に)トラコチカルコ人がトラパラン・ノノワルコを出てからこれまで335年になる」という文が来る。その欄外に、「今年は1629年である」という加筆がある。1629年の335年前なら「1294年」になるため、UNAM版では「これはチマルパインの計算ミスで、357年前が正しい」という注がついている<sup>(10)</sup>。

「1629年」を基準にすればそうだが、果たしてそれでよいのだろうか。確かに「1294年」は受け入れられない。『第七』の本文ではこの後、いわゆる聖書年代に言及があり、「1272年は天地創造から6471年、ノアの大洪水から4228年後だ」とある。つまり、天地創造は紀元前5199年、大洪水は前2956年になる。これはチマルパインの他の複数の作品にも出てくる聖書年代と同じで、矛盾がないため<sup>(11)</sup>、「1272年」に問題はない。

そこで、欄外に加筆された「1629年」を排除し、「335年前」が間違っていないとすれば、1272年に335年を足すと1607年になる。つまり、『第七』の少なくともこの部分は1607年に書かれたと考えられる。「1629年」は後からの加筆であり、チマルパインはあまり誤差の大きな計算ミスはしてないため、1607年の可能性は否定できない。

このほか、チマルパインがスペイン語で書いた「巻頭文書」<sup>(12)</sup>は内容的にも、文書のあ

る位置からも『メシカヨトル年代記』と密接な関係があるが、1621年が最新年になる。テノチティラン王家の1621年当時の子孫について述べているのだが、本文中で2度この年に言及があり、加筆ではないため、受け入れ可能である。

## §I - (b) 参考資料

チマルパインの全作品で参照された資料について述べるには膨大なスペースが必要で、ここで詳細な検証はできない。本稿ではチマルパイン作品の執筆年を割り出す目印とすることが目的であるため、『日記』と「史的回顧」に関係が深い作品、および執筆年がある程度、特定（推測）できる参照物に限ることとした<sup>(13)</sup>。

明記はされていないが、『覚書』にはテソソモクの『メシカヨトル年代記』（1609年）やクリストバル・デル・カスティーリョの『メシーカ人到来史 *Historia de la venida de los mexicanos*』（1600年）からの直接引用が何カ所かある。いずれもメシーカ巡歴譚の最初の部分（1064年）での引用である。デル・カスティーリョからの引用の1つは、『旧約聖書』の「出エジプト記」の葦の海の奇跡を思わせる、印象的かつ他の巡歴譚には見られない出来事を扱っている<sup>(14)</sup>。また、ベルナルディーノ・デ・サアグン師という著者名を示し、それに依拠した箇所もある。これはメシーカ人の祖先が海を渡ってこの地へ来たという話で、サアグンの『ヌエバ・エスパーニャ総覧 *Historia General de las cosas de la Nueva España*』（1577年頃）に着想を得ている。同書には第10書第29章第14節、第1書序文、第8書序文にその元になった話があり、アメリカ先住民はユダヤ人の末裔ではないというチマルパインの主張の根幹に関わる部分である<sup>(15)</sup>。また、『ローマ殉教録 *Martirologio romano*』（1583年）の名を挙げ、終りに近いところで聖書年代に3度、言及している。

『第三』でも、依拠したことは述べていないが、作者不詳の『オーバン絵文書 *Códice Aubin*』（1608年）やエンリコ・マルティネスの『ヌエバ・エスパーニャ宇宙誌・博物誌 *Reportorio de los tiempos e historia natural de esta Nueva España*』（1606年）を利用したことが分かっている。『オーバン絵文書』は数人の先住民絵師が描き継いだ年代記式の絵文書で、故地アストラン出発から1609年（記事は1608年が最後）までのメシーカ人の歴史を描いている。『第三』の1068年の巨木倒壊（70v～71r）、1325年のテノチティラン建設（93r）の記事は『オーバン絵文書』の文章とほとんど同じである<sup>(16)</sup>。

マルティネスの作品は1606年にメキシコ市で出版された。チマルパインは『第二』（四大陸の話）、『第四』（アメリカ先住民に似た北欧クールラントの住民の話）などでもしばしば同書を利用しており、『第三』ではコロン関係の情報（1484、1492～95年）をナワトル語に訳している<sup>(17)</sup>。また、聖書年代は1度だけ、1200年記事の欄外に「バビロニアで言葉の混乱が起こって4000年」とある。これも『ローマ殉教録』に拠る年号である。

『第七』では“Escolastica”という書をもとにバベルの塔の話をする。“Escolastica”は12世紀フランスの神学者ペトルス・コメストルの『スコラ学的聖書物語 *Scholasticae Historia*』を指す。信者が聖書を直接読むことを禁じられていた時代に、聖書代わりに愛読された書である。スペイン語訳が出るのは1699年だが、メキシコ市の北隣トラテロルコに設置されたサンタクルス学院（先住民エリート向けの高等教育校）には1543年のラテン語版があった<sup>(18)</sup>。ただし、チマルパインがラテン語を読めたのかどうか、はっきりとした証拠は見つかっていない。コメストル作品は他の書でもしばしば引用されており、間接引用の可能性もある。

このほか、『第七』ではメキシコ市郊外の荒野に庵を構えた隠修士グレゴリオ・ロペスに2度言及している。これはフランシスコ・ロサの『グレゴリオ・ロペス伝 *Vida del sieruo de Dios : Gregoiro Lopez*』（1613年）からの情報である。

『日記』では1611年6月10日にメキシコ市で観測された日食に関して、マルティネスの予告（11時34分～午後2時20分）と実際（午後3時～）との誤差を人々の反応とともに紹介したあと、日食の原理を説明している。その際、フワン・パウティスタの著作『メキシコ語での説教集 *Sermonario en lengua mexicana*』（1606年）に依拠すると明言している。また、フワン・デ・トルケマダが同僚の列福運動の一環として書いた『セバ스티アン・アパリシオ伝 *Vida de Sebastián de Aparicio*』（1605年）に拠ったと思しき箇所もある。『第七』と同じく、ロサ『グレゴリオ・ロペス伝』から引いた箇所もあるが、前号で詳細を明らかにしたように、『日記』で引用した3カ所はいずれも欄外加筆で、しかも全て原文のスペイン語のまま書き写している<sup>(19)</sup>。

また当時よく混同されていたイエズス会とテアティーノ会の違い（1612年2月25日）、アントニオ会の歴史（1614年4月25日）、サンタテレサによるメルセス会の改革（1614年9月18日）についても、スペイン語文献に依拠していると思われる<sup>(20)</sup>が、現時点で情報源は特定できていない。

「史的回顧」には依拠資料を示唆するものはないが、その末尾（pp.104～116）に挙げられた統治者一覧はマルティネスを参照にしたと言われている。確かにコルテス以降のスペイン人統治者、異端審問官についてはマルティネスをほぼそのまま翻訳しており、一部にせよ依拠したことは確かである<sup>(21)</sup>。

このようにチマルパイン作品の参考資料で最も新しいものの出版年は、『覚書』が1609年、『第三』は1608年、『第七』は1613年になる。また、「史的回顧」は留保付きで1606年、『日記』については、グレゴリオ・ロペス関連の記事は後付けの加筆であるから排除し、1606年となる。





### §I - (c) 共通記事

チマルパインの作品の多くはメキシコ盆地の諸民族の歴史を扱っているが、狭い範囲の歴史であるため、どうしても複数の作品が同じ年の同じ問題を扱うことが少なくない。その際、前に書いた作品を参考にすることは避け難い。記述のない年も少なくないため、各作品の記事の有無を年ごとに見れば、作品間の近さは一目瞭然である。表 3 (pp.8～9) はビクトル・M・カスティージョが作成したものをもとに、本稿の目的に合わせ、『日記』、「史的回顧」の情報を加えたものである<sup>(22)</sup>。

表 3 は分かりやすいが、これが示すのはあくまで表面的な近さにすぎず、扱われている出来事の内容、さらには記事の分量まで比較しないと、作品どうしの距離感は浮かび上がらない。ただ、これも紙幅の関係でここでは深入りできない。そこで、本稿に関わりのある作品間で、それぞれの取り扱い期間の重複する部分、重複する年数、記事がある年の数(表 4 では「有記年数」とした)、さらに同じ内容の記事の件数(同じく「共通事項」)を比べたのが、表 4 である。

表 4 チマルパイン主要作品における重複期間、共通事項など

比較作品	重複期間	重複年数	有記年数	共通事項	親近性
第三：覚書	1064～1299	235	26	26	×
第三：回顧	1064～1520	456	44	28	×
第三：第七	1272～1520	245	116	156	○
日記：第七	1577～1591	14	13	33	◎
日記：回顧	1577～1609	32	16	25	◎
回顧：第七	1272～1591	319	65	79	○

×：低い      ○：高い      ◎：きわめて高い

以上から、『第三』と『覚書』、『第三』と「史的回顧」は重複期間が長いものの、共通して記事のある年は少なく、親近性は低いと言える。とりわけ『第三』と「史的回顧」は内容的にも重なりがきわめて少ない。また、『第三』と『第七』は重複期間が長く、内容も含め親近性が高い。『日記』と『第七』、『日記』と「史的回顧」は重複期間が短いものの、重複部分の濃度は著しく高い。「史的回顧」と『第七』は重複期間の長さからすると記事が重なる年数は少ないとはいえ、内容まで踏み込めばまずまず高いと言える。

親近性の高い作品どうしの参照関係については、共通事項をつぶさに検討する必要がある。『第三』と『第七』については、ビクトル・M・カスティージョが 1488 年の記事を比較して、『第七』が『第三』を土台にし、新しい情報を加えたことを明らかにした<sup>(23)</sup>。

『日記』と『第七』の関係の濃さについては旧稿でも指摘したが、1581 年(両者とも記

述なし)、86年(両者とも1月19日と6月11日のみ記述あり)、87年(『日記』は記述なし、『第七』はごく少量)など、空白部まで似通っている。さらに85年にメキシコ市で開催された地方公会議に先駆けて宗教行列が行われ、それに参加した6人の司教を紹介しているが、その順番まで同じ、というように共通部分が多い<sup>(24)</sup>。

違う点は『第七』がチャルコにも少なからず関心を向けているのに対し、『日記』はほぼメキシコ市のことしか見ていないという点である。上記重複期間に『日記』が取り上げた事項は52件(うち2件はスペインと教皇関連で、他は全てメキシコ市関連)、『第七』は56件で、両者で重複する記事34件は全てメキシコ市のことで、内容も同じである。『第七』が単独で取り上げた22件のうち、チャルコ関連は15件、メキシコ市が4件、コヨアカンが3件という内訳になる。したがって、メキシコ市の出来事に関して一方が他方に依拠したとしても、それぞれ別の情報源ももっていたことになる。あるいは共通の情報源からの記事を採用するか、それぞれ取捨選択したのかもしれない。なお、両者の重複する期間(1577~91年)は、チマルパインがメキシコ市に来る1593年10月5日より前の話であり、自分が目撃したのではなく、何かに依拠している。

また、『第七』と『日記』の前後関係を示唆するのが、グレゴリオ・ロペス関連の記事である。『日記』でこの関連記事は3件あり、前号で指摘したように、いずれも欄外に『グレゴリオ・ロペス伝』の原文(スペイン語)のまま転写している。ところが『第七』で取り上げたロペスの誕生と死去の記事はナワトル語に直され、本文に収められている。つまり『日記』では1613年刊の伝記を読んですぐ、翻訳する暇もなく書き写したのに対し、『第七』ではナワトル語に訳し、本文に入れる時間的余裕があったことになる<sup>(25)</sup>。

### §I - (d) その他

さて絶対的な執筆年の割り出しは難しいとしても、前後関係を示唆する要素は他にもある。例えば『第七』本文には1621年以降に書かれたことを明示する箇所がある。1542年に隠修士グレゴリオ・ロペスがマドリードで誕生したという記事である。チマルパインは同所で、「そこ(マドリード)には今、我らが大君主フェリペ4世がおわす」<sup>(26)</sup>と記している。フェリペ4世(1621~65年)が16歳でスペイン国王になったのは1621年であるため、少なくともこの部分はそれ以降に書いている。当時は王位継承権のある王子でも夭折することが珍しくなく、正式に後を継ぐまで、○○何世とは呼ばなかったからである。しかも『第七』のこの記述は後からの加筆ではない本文であるため、確度は高い。他方、『日記』にも1605年4月8日、フェリペ3世(1598~1621年)に王子が誕生し、やはりフェリペと命名されたという記事がある。後のフェリペ4世のことだが、「4世」に言及がない。つまりこの部分は1621年以前に書かれた可能性が高い<sup>(27)</sup>。

したがって、『第七』は1607年頃には書き始められ、1621年以降も書き継がれ、1629年頃に見直され、『日記』は1621年までには書き終えられていたことになる。

## § II 『日記』と「史的回顧」の執筆時期について

以前にも指摘したように、『日記』は同時代史とは言え、決してリアルタイムで書かれた訳ではない。その良い証拠が、本来なら1614年3月に書くべき支倉使節団の記事を13年5月としてしまった例である<sup>(28)</sup>。もちろん後で抹消しているが、下書きか何かを転写したからこそこったミスであろう。実際の日時よりもかなり後になって（この場合は少なくとも1年後）書いたことを示す例は枚挙にいとまがない。

『日記』には書き出し部分がない。1971年、メキシコの歴史家、レイェス・ガルシアが別の古文書の2葉が『日記』の1577年から89年部分で、パリのフランス国立図書館所蔵の『日記』に繋がることを発見した。しかしそこにもタイトルや書き出しと思えるものはないため、冒頭の何葉かが欠落していると考えられる。また、最後の締め言葉もない。282ページの半ばで最後の記事（1615年10月14日）が終わり、その余白にシグエンサー・イ・ゴンゴラの書き込みがある。「ドン・ドミンゴ・デ・サンアントン・ムニョン・チマルパイン・クワウトレワニツィンはもっと長生きしたが、この件に関してこれ以上、書類は見つからなかった…」<sup>(29)</sup>。中途半端な終わり方で、途中で止めた理由も不明だが、17世紀末の手稿の状態から判断して、そこで筆を置いたのは間違いなさそうである。

### § II - 1 「史的回顧」の執筆時期

『日記』が最も初期に書かれた作品の1つであることについては何人かの研究者も触れており<sup>(30)</sup>、筆者も同意見である。だが、「史的回顧」も含めての話だろうか。それについては誰も明言していないのだが、ここで私見を述べ、その根拠を3つ挙げたい。

筆者は「史的回顧」は他のどの作品よりも、『第三』や『第七』よりも、そして『日記』よりも先に作成されたと考える。根拠の1つは第5代ヌエバ・エスパーニャ副王コルーニャ伯の在職期間である。それに言及があるのは「史的回顧」（2回）と『日記』および『第七』である。「史的回顧」は本体部分（天地創造以来の歴史年表）と、締めの統治者一覧（メシーカ人指導者、スペイン人総督・副王、司教、異端審問官）から成るが、そのどちらにもコルーニャ伯は1580年10月4日から83年6月29日まで「2年8カ月33日」の間、副王を務めたとある。問題は「33日」で、『日記』と『第七』はいったんそのまま記した後で「33日」を抹消し、「2年9カ月」<sup>(31)</sup>と訂正している。つまり、どちらも「史的回顧」を引き写した後、修正したと考えられる。

もう1つの根拠は聖書年代である。先にも例を出したが、チマルパインはしばしば「…

の出来事は天地創造から〇〇年後、ノアの大洪水から△△年後のことである」というように、『旧約聖書』に出てくるメルクマールの出来事の年号に言及する。彼の全作品をとおして、聖書年代は11度出てくる。同じ作品で2度、3度出ることもあるため、言及がある作品は『第二』、『覚書』、『第三』、『第四』、『第七』、『ナワトル語によるメシコのクロニカ』と「史的回顧」である。このうち「史的回顧」を除く全てが、天地創造を紀元前5199年（大洪水は前2957年、バベル崩壊は前2800年など）としており、一致している。この年号が1580年代に刊行された『ローマ殉教録』に依拠していることは、チマルパインも何度か言及している。ところが、「史的回顧」では天地創造は紀元前4753年、大洪水が前2557年となっている<sup>(32)</sup>。つまり、「史的回顧」は『ローマ殉教録』を読む前、他は読んだ後に書かれたと考えられる。1580年代に出たこの書をチマルパインがいつ読んだのかは不明だが、「史的回顧」だけ聖書年代が違うことをここでは指摘しておきたい。

「史的回顧」が最初期に書かれた証拠の補足をもう1つ挙げると、コルテスが1525年にホンジュラス遠征の途中、同行していたアステカ最後の王クワウテモクを陰謀計画の廉で絞首刑にした事件に関する情報である。ある人物の密告にもとづいてこの処刑が行われたことは、テソモクの『メシカヨトル年代記』(1609年)、イシュトリルショチトルの『テスココ王国史 *Compendio histórico del reino de Texcoco*』(1608年)など多くの資料が触れている。さらに作者不詳の『トラテロルコ年代記 *Anales de Tlatelolco*』(16世紀半ば)は、密告者として「コツテメシ *Cotztemexi*」という風変わりな名前を挙げている。チマルパインならこの手の情報は書き洩らさないとはいえず、実際『第七』ではコツテメシに言及がある<sup>(33)</sup>。ところが、「史的回顧」は事の顛末を説明しているものの、密告者の名前を記していない。つまり、「史的回顧」はコツテメシの名を出した作品を読む前に、『第七』はその後で書かれた可能性が高い。

ではチマルパインはどの作品を読んだのであろうか。コツテメシの出身地をどこにしているかが鍵になる。最初に彼の名前を出した『トラテロルコ年代記』は経緯の説明が最も詳しい。虚偽の密告でクワウテモクを死に至らしめた人物について、同書はテノチティトラン出身のメシカトル・コツオオロルティク *Mexicatl Cotzoololitic* という名で、取り巻きに囲まれ、まるで王のように振舞っていた侏儒だと紹介する。「メシカトル」は「メシコの人(テノチティトラン人)」、「コツオオロルティク」とは「膨らんだ脹脛」の意で、トラテロルコ人はこの「嘘つき」に、前後を逆にして略したコツテメシというあだ名をつけた<sup>(34)</sup>。処刑されたクワウテモクは、コルテスらの無血入城を許し容易に征服されたアステカ王モクテスマの異母弟で、クワウテモクの母はトラテロルコ出身だったため、『トラテロルコ年代記』は彼を身最上とする。一方、両親ともテノチティトラン王家の血を引くテソモクはコツテメシをトラテロルコ人とし<sup>(35)</sup>、テスココ王家にも連なるイシュトリルショチト

ルはイスタパラパかメシカルシンコの出身とする<sup>(36)</sup>。また、現場にいたコルテス自身は「(名を)メシカルシンゴといい、洗礼後はクリストバルと呼ばれるこのテヌスティタン(テノチティトラン)の都の高貴な市民」と報告書簡に認めている<sup>(37)</sup>。コツテメシをトラテロルコ出身とするのはテソソモクだけで、それを踏襲する『第七』は『メシカヨトル年代記』が執筆された1609年以後、コツテメシの名を出していない「史的回顧」はそれ以前に書かれたと言える。

では「史的回顧」はいつ頃、執筆されたのか。旧稿で1609年3月から11月末までに書かれたと自説を述べたが、ここで再度その根拠を確認しておこう。1609年3月とする根拠は、「史的回顧」が始まる直前、『日記』の1608年10月に「オアハカ司教だったコバルビアスがミチョアカン司教に任命され、(任地へ)移動する途中でメキシコ市に立ち寄り、1609年3月末まで4ヶ月半(マ)滞在した<sup>(38)</sup>」と記していることである。1608年の記事の本文中に1609年のことを書いており、それに続く「史的回顧」は3月以降に書かれたことになる。他方、同年11月までとした根拠は、テノチティトランの判官・統治官フワン・パウティスタに関する記事である。「史的回顧」末尾のメシーカ人指導者・テノチティトラン統治者一覧で彼は第31代統治者として紹介され、「今年1609年も統治官である」と記されている。「史的回顧」のすぐ後に続く、1609年1月にフワン・パウティスタは再任されたが、同年11月に故郷のマリナルコに帰っている<sup>(39)</sup>。この退任の事実を「史的回顧」に記していないことが、それまでに執筆を終えたことを示唆している。

「1609年説」を補強する根拠をもう2つ挙げておこう。1つはやはり「史的回顧」のスペイン人統治者一覧の書き出し部分で、「今年1608年まで」の「8」は「9」を書き直したものだという点である<sup>(40)</sup>。つい実際の年を書いてしまったが、「史的回顧」は1608年の締め括りとして書いていることに気づいて修正したのであろう。

もう1つは、やはり「史的回顧」の最後に出てくる異端審問官のリストで、その最後に挙げられたアロンソ・デ・ペラルタとグティエレ・ベルナルディーノ・デ・キロスである。そのあとに続く『日記』によると1609年11月30日にペラルタがチャルカス司教に転出し、同日、キロスが主席異端審問官になった。その件は「史的回顧」には反映されていない。したがって「史的回顧」はその時までには書き終えられていたことになる<sup>(41)</sup>。

さて、「史的回顧」は、『日記』の1608年10月の記事が終わったすぐあと、同じページのはほぼ真ん中から始まる。内容的に前後と関係がないにも関わらず、43ページも異質な年表が占める。そして、最後もまた116ページの上3分の1で終わり、1609年の記事が躊躇いもなく続く。このような体系的な長文の挿入は思い付きや即興では不可能で、下書き原稿を用意しての計画的なものである。したがって、『日記』の一部として「史的回顧」を挿入したのは1609年だが、原案はそれ以前に作成していたことになる。

## §II-2 『日記』の執筆時期

先に、『日記』では支倉使節の記事を1年間違えて1613年に書いたことを指摘した。ところが同じ1613年でも、9月4日には「(私は)20年前からサンアントニオ・アバーにお仕えしている」とある。実際、彼は1593年10月5日からこの教会に入っており、ちょうど20年になる。そのためこの部分についてはその日付けからあまり日を置かず書いたと考えられる<sup>(42)</sup>。さらにこの1613年には他の年と違う特徴がある。この年だけ記名記事が4本も集中し、わざわざ「私、ドン・ドミンゴ・デ・サンアントン・ムニョン・クワウトレワニツィン・チマルパインがこれを記す」と名乗って記事を締めくくっているのである。記名記事の内容は、① 3月24日、ニコラス・エルナンデス・トラカエレルの母、マルティナ女史の訃報：② 5月31日、十字架建立反対者の病死：③ 9月4日、湖の埋め立て：④ 9月28日、新任の大司教への期待感の4つで、通底する特徴はない。もうひとつ気になるのが、4度とも自分の名前に「ドン」という敬称を付けている点である。同じ『日記』で自分の名前を出した1593年(サンアントニオ・アバー教会での奉仕開始)と1609年(親友の死)では「ドン」無しであった。詳しくは旧稿<sup>(43)</sup>に譲るが、明らかに自身に対する見方が変化したことを示している。

さて、『日記』と「史的回顧」の執筆時期を考えるうえで考慮すべきは、先住民が作成した歴史資料への依拠が他の書に比べ極端に少ないという点である。上の(b)では依拠した参考文献を執筆年の目安としたが、ここではチマルパインが故郷に戻って博捜し、写本を取った歴史資料(書名・著者とも不詳の絵文書やアルファベット表記のものも含む)や直接長老から聞き取った記録などを対象とし、それらを郷土史資料と呼ぶことにする<sup>(44)</sup>。そうして集めた資料をもとにチマルパインはいくつもの作品を残した。その多くで彼は「昔の人たちはこう言っている in iuh quitohua huehuetque」、「描いている yn quimachiyotia」、「年代記に現われるところによれば yn iuh neztica yn inxiuhtlapohua」など、どの資料かは特定していないが、どのような種類の情報源かは言及している。

『第三』、『第七』、『覚書』で使われた資料を、それが作成された地域ごとに分けると、次のようになる<sup>(45)</sup>。なお、かっこ内の数字は言及された回数を表わす。

『第三』：テノチティトラン (24)、チャルコ (4)、その他 (4)

『第七』：テノチティトラン (7)、トラテロルコ (3)、コヨアカン (1)、  
チャルコ (24)、その他 (8)

『覚書』：テノチティトラン (9)、チャルコ (7)、ウエフトラ (2)、  
トゥラ (2)、その他 (2)

「チャルコ」はもっと細かく分類することも可能だが、ここでは以上の3作品の依拠資料が多様である点を示せば十分であろう。また、郷土史資料を含む資料の引用回数の総計

は、『第三』が全 96 ページで 32 回、同じく『第七』は 160 ページで 43 回、『覚書』は 106 ページで 22 回になる<sup>(46)</sup>。一方、『日記』は 243 ページで 3 回(うち 2 回は欄外に加筆)、「史的回顧」は 43 ページで 1 度もない。『日記』や「史的回顧」では郷土史資料はほとんど、あるいは全く利用されていない。少なくとも言及はない。

引用と剽窃の境目があまり厳密ではなかった時代だけに、出典を示していないことがそのまま引用の少なさを物語っているとは限らないが、それでも作品の特徴を垣間見せる。つまり、『第三』、『第七』、『覚書』などが質量とも郷土史資料に多く依拠しているのに比べ、「史的回顧」と『日記』ではその依存度が極端に少ない点である。そのため、『歴史報告書』はチャルコ地方の歴史を中心に扱っているのに対し、「史的回顧」と『日記』の主題はメシーカ、テノチティトラン、メキシコ市の歴史・出来事になっている。

対照的に、『日記』で扱われたチャルコ関連の情報はきわめて少ない。①1598 年 7 月、チャルコ出身のフランシスコ会献身者 donado のケツアルマサツィンが(布教活動のため)ヌエボ・メヒコ(現合衆国西南部)到着の報；②1604 年 10 月、チャルコ 4 地区に新課税(木材提供)；③1606 年 7 月、父の死、④同 10 月、祖母の死；⑤1607 年 9 月、アマケメカで排水路掘削工事、木材提供、⑥同 11 月、木材提供、掘削工事中断、⑦同 12 月、木材切り出し；⑧1608 年 1 月、木材運搬；⑨1610 年 4 月、堤道補修工事にアマケメカが人手提供、⑩同 9 月、アマケメカ出身のドミニコ会士リベラ師の助祭叙任；⑪1611 年 7 月、ケツアルマサツィンがヌエボ・メヒコから戻り、⑫同 11 月、再度出発；⑬1615 年 6 月、アマケメカの土地を巡る騒動のわずか 13 件である。しかもそのうち 6 件は個人的な関係者についての情報、6 件は課税・労働に関する情報で、かなり偏りがある。

「史的回顧」では、1160 年、アマケメカ人のチコモストク出発；1241 年、同、チャルコ着；1269 年、アマケメカ建設；1324 年、チャルコでの儀式的戦争；1465 年、テノチティトランによるチャルコ征服の 5 件で、いずれも先スペイン期の話に限られる。

その一方、『日記』ではスペインやヨーロッパなど海外の出来事への言及が他の書に比べ目立つ。ローマ教皇・スペイン国王・高官・高位聖職者の訃報は、ミサなどで耳から得た情報の可能性が高い。また、長崎の二十六聖人の殉教(1597 年 12 月)、マニラでの中国系商人 sangleyes の暴動(1605 年 12 月)、フランス国王アンリ 4 世の暗殺(1610 年 9 月)も伝聞情報であろう。ただ、情報源の特定はできていないが、明らかに書物から得たと思われる情報も見られることは上で述べた通りである。

『日記』や「史的回顧」がアステカ王国やメキシコ市の歴史を扱っているのは、利用しうる資料の制約を受けたためである。チマルパインは 14 歳で故郷を離れ、1 人でメキシコ市の小さな教会で写字生として活動し、独学でこつこつ知識を増やしていった。その過程で彼が目にした資料は、ヨーロッパやメキシコで出版された書籍やメシーカ人が記した資

料がほとんどであった。『日記』や「史的回顧」はまさにそのような資料にもとづいて書かれたもので、この段階でチマルパインが有していたチャルコの郷土史についての知識は、離郷前に得ていたものと大差なかったと思われる。

故郷チャルコ地方の歴史を記した郷土史資料の存在を知り、収集し始めるきっかけは、おそらく 1606 年 7 月の父の死であった。父イシュピンツィンは地元ツァクワルティトラン・テナンコに伝わる歴史絵文書を、義理の父アヨポチツィンが亡くなった 1577 年に受け継いでいた。イシュピンツィンの死後、その絵文書は本来の継承者であるチマルパインの叔父のもとに戻されたが、前後してチマルパインはその絵文書を書き写し、新たな情報を書き加えた。これを契機にチマルパインの郷土史資料集めが始まる。最後に彼が取った写本はフェリシアーノ・デ・ラ・アスンシオン・カルマサカツィンがアルファベット表記した年代記で、この人は 1611 年に帰天しているため、チマルパインは 1606 年から 11 年にかけて郷土史資料を増やしていったと考えられる<sup>(47)</sup>。

参考資料が増えると、資料間の齟齬に気がつき、どれを信用すべきか判断が必要なケースが出てくる。チマルパインも自分なりの評価を下したり、他の資料に当たり確認する必要があるとしたり、結論に至らず両論を併記したり、参考として別意見を紹介するなどしている<sup>(48)</sup>。ところが、『日記』や「史的回顧」にはそれもない。このこともまた、その執筆時には参考資料が限られており、執筆時期が早かったことを示唆している。

## 結び

本稿ではチマルパインの主要な著作に焦点を当て、最新年号、参考資料、共通事項などを比較し、それぞれの執筆時期や前後関係を明らかにしようと試みてきた。『覚書』（1631 年）と『第八』（1620 年）については、これまでの通説を覆すような要素は発見できなかった。しかし、『第七』については後で書き加えられた「1629 年」を採用するには根拠が薄弱であり、本文に出てくる数字をそのまま信じ、1607 年には書き始められたと考えるべきであろう。ただし、1613 年以降、1621 年にも書き継がれていたことを示す痕跡もある。1629 年にも見直しが行われていたのであろう。

「史的回顧」はチマルパインの全作品中、最も早く執筆された。『第七』や、「史的回顧」を内包する『日記』よりも前である。原案を下敷きにして「史的回顧」が『日記』に挿入されたのは 1609 年 3 月から 11 月末の間であるが、その原案はもちろん 1609 年よりも前に書かれたものである。

『日記』のそれぞれの日付けは、繰り返すが、執筆された日付けではない。ただし後になるほどリアルタイムに近づくことは確かだ。それを示す例は終盤に近い 1613 年に見られるが、この年にはそれまでと違う特徴も見られる。1609 年の「史的回顧」からこの年ま

で大きな分岐点が潜んでいるように思える。『日記』そのものは1615年10月が最後で、執筆は遅くとも1621年までに終わっている。

まだまだ解明にはほど遠いが、現時点で見えてきたことをまとめると、次のようになる。チマルパインは若くして親元を離れ、メキシコ市の外れ、ショロコ地区のサンアントニオ・アバー教会で写字生をしながら研鑽を積み、西欧的教養やキリスト教的歴史観を身に着けた。このことは『第一』や『第二』の豊富な引用からも透けて見える<sup>(49)</sup>。サアグンやマルティネスの書を読み、当時多くの人に信じられていた「先住民＝ユダヤ末裔」説を一蹴し、祖先は東方から船で渡って来たという自説を補強した<sup>(50)</sup>。また、メシーカの歴史（『メシカヨトル年代記』、『オーバン絵文書』など）にも親しんだ。それは故郷チャルコ・アマケメカの視点で描かれた歴史ではなく、アステカの都テノチティトランの歴史書であった。

一方、1606年の父の死をきっかけに郷土の歴史にも触れるようになった。祖先から代々伝えられてきたチャルコ地方の歴史を知り、数年間に少なくとも6つの絵文書の写本を取り、チマルパインは自分自身を、そして自分がそれまで書いてきたものを見直すことにし、自らに「ドン」という敬称をつける。そしてキリスト教的普遍史、メシーカ中心の先住民史から、郷土史の視点も取り込んだ視野の広いメソアメリカ史を書こうと方針を転換する。その分水嶺の始点とも言えるのが「史的回顧」で、かつての自分（歴史観）と対峙すべく、以前に書いたもの（聖書年代も含め）を修正せずに、そのまま曝け出した。

もちろん、転換はそう容易ではない。『日記』はその後も書き続けられ、変化への胎動を感じさせる年（1613年）もある。おそらく『日記』と並行して『第三』の執筆も進められた。上でも見たように、『第三』もまだまだメシーカ資料への依存度が高いが、他地域の資料も取り込もうという姿勢が見られる。カステイーリョが指摘するように、『第三』は年号にかなりの混乱が見られ、方向転換を強いられる<sup>(51)</sup>ののだが、産みの苦しみを表わしているとも見ることができよう。

先住民の伝統的な絵文書にはいくつかのジャンルがあり、歴史書はその1つなのだが、アメリカのアステカ研究者ブーンも言うように、それらは基本的に「地方史」、「郷土史」である<sup>(52)</sup>。チマルパインも本来なら郷土の歴史に終始し、他の地方の歴史に関心を抱くこともなかったであろうが、14歳で地元を離れ、特殊な環境で「教育」を受けたため、まずヨーロッパ的、メシーカ的知識を得、後から「郷土史」の洗礼を受けた。世界史・普遍史から郷土史への転換軸が「史的回顧」なのである。

注

- (1) 17世紀末には、メキシコ大学教授シグエンサ・イ・ゴンゴラ（1645～1700年）がチマルパインの手稿を所有していた。『日記』には彼の手による書きこみも残っている。その後、イエズス会に遺贈され、1830年代にはフランス人愛書家が入手し、自国に持ち帰った。
- (2) チマルパインによる写本のうち、『メシカヨトル年代記』はモクテスマの孫にあたるエルナン・デ・アルバラード・テソソモク（1523?～?年）の作品（ナワトル語）とされる。原文は残っておらず、チマルパインがとった写本のみ現存する。チマルパインの自筆写本は1983年に他の文書類とともに発見され、原文とその英訳が“*Codex Chimalpahin*” 2 vols.として刊行された（1997年）。『メシカヨトル年代記』やロペス・デ・ゴマラ（1511～59年）の『メキシコ征服記』（原著1550年）の写本ではチマルパインによるテキストへの介入や加筆がかなり見られる。
- (3) 拙稿「チマルパインと1608年」、『摂大人文学』第22号、pp.1～35、2014、「チマルパインと「クリオーリョ」」、同第23号、pp.1～24、2015、「チマルパインと「ドン」」、同第24号、pp.1～29、2016、「パリのチマルパイン」、同25号、pp.1～29、2018。
- (4) 例えば、V́ctor M. Castillo F., “Estudio preliminar” en Chimalpain, *Primer amoxtli libro, 3<sup>a</sup> Relación de las Diferentes Historias Originales*, IX や José Rubén Romero Galván, “La historia de un cronista”, en *Octava Relación*, pp.22～23.
- (5) BnF、Manuscrit Mexicaine #74, fol. 144r.
- (6) 『第八』（fol.229r～272v）で、「1620年」は最初の5葉に集中的に出てくる（229r、232r、234v）。
- (7) 「14年を加えた時」とはナワトル語独特の記数法に関連している。Chimalpáhin, *Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacan*, fol. 61r, nota 244.
- (8) 2人の叔父については『第八』（fol.239r/v）に、祖父ドミンゴ・エルナンデス・アヨポチツィンが亡くなった時、この2人はまだ幼かったため、チマルパインの父フワン・アグスティン・イシュピンツィンが代々伝わる歴史絵文書を預かったとある。他の書でもツイウトラカウキが出てくるのはいずれも1295年の記事で、特に『第五』は詳しい。
- (9) 例えば、「巻頭文書」の1367年でモクテスマ一族の話になり、1621年まで飛ぶ。
- (10) Chimalpain Cuauhtlehuāniztīn, *Séptima Relación*, UNAM, p.19, nota 32. なお、BnFのオンライン版はこの年号の部分だけ画面からはみ出していて、何年か確認できない。
- (11) 聖書年代に関してチマルパインは一部を除き、全面的に『ローマ殉教録』に依拠している。同書はグレゴリオ改暦を機に1580年代に出版され、聖務日課の一時課でその日の聖人について読み上げられた。聖書年代は『第二』（9v、10v）、『覚書』（55r、65v）、『第三』（73r）、『第四』（117v～118r、120r、id.）、『第七』（149v）、『クロニカ』（89r）、「回顧」（pp.72～73）で扱われている。
- (12) 『メシカ人の歴史つまりクロニカ *Historia o chronica mexicana*』という題がついているが、似た題のものが他にもあるため、混同を避け、ここでは「巻頭文書」と呼ぶ。なお、この文書を研究した酒井は、著者はチマルパインではなく、誰かの書いたものを転写したに過ぎないとする。「巻頭文書」は1983年にケンブリッジ大学の聖書協会コレクションで発見された『コディセ・チマルパイン』第3巻の巻頭、『メシカヨトル年代記』の直前にある。このコディセは2014年にメキシコ政府が購入し、同国国立歴史人類学博物館が所蔵している。

- (13) 現物が写本が現存し、研究の蓄積があるものに限定した。なお、チマルパインが収集した絵文書や長老たちから行なった聞き取り調査については § II-2 で少し触れる。
- (14) 『メシカヨトル年代記』については注(2)を参照のこと。クリストバル・デル・カステリーヨ (1524?~1604?年) は出自も含め、不明な点が多い。『スペイン征服記 *Historia de la conquista*』 (1599年) と『メシーカ人到来史』の写本断片のみが現存する。
- (15) サアグン (1500~90年) の『ヌエバ・エスパーニャ総覧』は、ほぼ完成稿 (1577年頃) のまま本国に送られたが、スペイン王室に没収され、下書きや書き直しの手稿がメキシコでは出回っていた。フワン・スアレス・デ・ペラルタ (1536?~?年) も『インディアス発見論 *Tratado del descubrimiento de las Indias*』 (1589年頃) でサアグンを何度か引いている。『ヌエバ・エスパーニャ総覧』は現在フィレンツェのラウレンツィアーナ図書館にあるが、どのような経緯でメディチ家に渡ったのかは不明。19世紀半ばになってようやく部分的に出版された。
- (16) María Castañeda de la Paz, “El Códice X o los anales del “Grupo de la Tira de la Peregrinación”; copias, duplicaciones y su uso por parte de los cronistas”, pp.183~214.
- (17) マルティネス (1555?~1635年) はドイツ系移民で、天文学や土木工学に詳しく、メキシコ市で印刷業を営み、アウディエンシアで通訳も務めた。Henrico Martínez, *Reportorio de los tiempos e historia natural de esta Nueva España*, pp.229~240.
- (18) チマルパインの言う“Escolastica”がコメストル (1100?~87年) の著作であることは、UNAM版の p.15、注 28。さらに S.A.D. Messiaen, “Some interesting observations on Chimalpahin by us of his Difetentes Historias Originales”, pp.228~231 が詳しい。アルフォンソ 10 世時代 (1252~84年) に著された『大世界史 *Historia General*』でもコメストルはしばしば引用されている。ロサ『グレゴリオ・ロペス伝』については前号 pp.12~14 を参照のこと。
- (19) フワン・バウティスタ (1555~1613?年) の『メキシコ語での説教集』は筆者未見。トルケマダ (1565?~1624年) 『セバスティアン・アパリシオ伝』は前号 p.12 を参照のこと。
- (20) サンタテレサの改革については、『第七』の 1564年の記事でも言及がある (fol. 210r)。アントニオ会については『聖アントニオ修道会史概要 *Antoniana historiae compendium*』 (1534年) が候補だが、チマルパイン自身がラテン語を難なく読めたとは思えない。
- (21) 例えば、Castillo, *Estudio preliminar*, LII ほか。ただし、チマルパインはテノチティトラン領主、スペイン人統治者、司教、異端審問官の名前と在職期間をリストアップしているが、マルティネスは司教のリストを挙げていない。また、テノチティトラン領主リストには根本的な違いがある。マルティネスは初代トラトアニのアカマピチトリから第 9 代のモテクソマまでしか挙げていないのに対し、チマルパインはアストランを出た時の指導者から、植民地当局から任命された統治官 (1609年まで) も挙げています。しかもマルティネスのリストには統治期間や順番に間違いがあり、まったく別物である。スペイン人統治者の在位年についても、チマルパインは「史的回顧」本体の記述に合わせ、修正している。
- (22) Víctor M. Castillo の“Los anales de la 3a Relación en el contexto de los demás”をもとに、『日記』と「史的回顧」の資料を付け加え、『日記』や「史的回顧」と関連性が薄い作品の情報は削った。

- (23) 1488年、テノチティトランに征服されて以来空位になっていたチャルコ領主の復位を求め、4人の候補者がテノチティトランを訪問した。この4人のうち『第三』では1人の名前が不明だったが、『第七』ではその名前も記していることによる。Victor M. Castillo, “Estudio preliminar” al *Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacán*, XLVII~XLIX.
- (24) 拙稿「チマルパインと1608年」pp.17~18では、『日記』が『第七』の続編であるという印象に流され、この重複部分は『日記』が『第七』を下敷きにしたとしてしまったが、本稿で修正したい。
- (25) 拙稿「パリのチマルパイン」、pp.12~14。『日記』と『第七』で、1589年5月のサンタフェ移住と96年7月の訃報が重複している。
- (26) Chimalpáin, *Séptima Relaciones de las Diferentes Historias Originales*, fol. 205r/v.
- (27) Chimalpáhin, *Diario*, p.41. また、同書の1613年6月28日(p.225)には「スペインにおおす我が主君フェリペ3世」とあり、この部分は王の生前(~1621年)に書かれたことを示す。
- (28) *ibid.*, p.217.
- (29) *ibid.*, p.282.
- (30) 例えばカスティージョは、『日記』はほかの『歴史報告書』を執筆するための資料を手に入れる前に書き始めることができた唯一の作品と評している(Castillo, *Estudio preliminar*, XXX)。一方で彼は『第三』が最初の作品と考え、UNAM版のタイトルも“*Primer Amoxtili Libro*”「最初の本」を主題とし、『第三』云々を副題に回している。
- (31) Chimalpáhin, *Diario*, fol. 17v (1583年6月29日)、「史的回顧」の本体はp.100、一覧はp.110。『第七』(fol. 221r)は「2年9カ月3日」とし、なぜか「ほぼ4年」と言い添えている。
- (32) 聖書年代については注(11)を参照のこと。Chimalpáhin, *Diario*, pp.72~73。『ローマ殉教録』はエウセビオス(263~339年)やヒエロニムス(331~420年)の計算に基づく。なお、「史的回顧」の聖書年代が何に依拠したのか、あるいはチマルパインが独自に算出したのかは不明。彼がよく利用しているマルティネスはベーダ(673~735年)の『時間計算論』(725年)に拠り、天地創造を前3952年としているが、チマルパインはそれを採用していない。
- (33) Chimalpáhin, *Diario*, p. 93; *ibid.*, *Séptima Relación*, fol. 194r. 『コディセ・チマルパイン』に含まれる「巻頭文書」と「テノチティトラン歴代領主」もトラテロルコ出身とし、「巻頭文書」は洗礼名クリストバルも記載している。
- (34) “Los gobernantes de Tlatelolco” en *Anales de Tlatelolco*, pp.28~35.
- (35) Tezozómoc, *Crónica mexicanoyotl*, fol. 60v. トラテロルコはテノチティトランの北に隣接し、双子都市というイメージがあるが、1473年にテノチティトランに征服されて独立国の地位を失い、服属を強いられていた。スペインとの征服戦争中も、その後も確執があった。
- (36) Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, *Compendio histórico del Reino de Texcoco*, p.502. イシュトリルシヨチトル(1578~1650年)はカスティソ(クオーター)ながら、母方の祖先の歴史に関心を注ぎ、いくつもの歴史書をスペイン語で残した。イスタパラパ、メシカルシンゴはテノチティトラン近郊の主要都市。
- (37) コルテス『第五報告書簡』、p.441。コルテスはメシカルシンゴを人名と誤解している。ゴマラ

はコルテスの言葉をほぼそのまま繰り返しているが、ゴマラを筆写したチマルパインは 2 カ所でクリストバルの後にコツテメシを加筆している(*Chimalpáhin y La conquista de México*, p.405)。また、やはり現場にいたベルナル・ディアス・デル・カステイーリョは、テノチティトランの有力者タピアと総大将だったフアン・ベラスケスの 2 人を密告者として挙げている (III、p.213)。これは洗礼名で、フアン・ベラスケスとは副官 *cihuacoatl* のトラコツィンを指す。トラコツィンはクワウテモクの処刑後、コルテスからテノチティトランの領主に指名されたが、帰途、病没した。

- (38) *Chimalpáhin, Diario*, p.72 (1608 年 10 月 15 日)。  
 (39) *ibid.*, 統治者一覧は p.106、1609 年 1 月の記事は p.116、09 年 11 月の記事は p.122。  
 (40) *ibid.*, p.107。前号 p.25 参照のこと。  
 (41) *ibid.*, 一覧は p.116、1609 年 11 月 30 日は p.123。  
 (42) *ibid.*, p.217 (1613 年 9 月 4 日) ただし、下書き原稿を清書しただけという可能性もある。  
 (43) 拙稿「チマルパインと「ドン」、pp.11~15。  
 (44) 『第八』で詳しく説明しているように、チマルパインは故郷チャルコ地方の歴史資料の写本を少なくとも 5 つ取った。『第五』でもその 1 つと、『第八』には挙げられていない写本を利用している(*Quinta Relación*, fol. 134r~135v)。  
 (45) どこの資料かが明記されていない場合でも、記事の内容によって地域を特定した場合もある。それさえ不明な場合や「別の人たちは…」など曖昧なものは「その他」として数えた。ウエフトラはチャルコ地方の北隣、テスココ地方の町。また、ここでは「チャルコ」としてまとめたが、実際にはトラルマナルコ、トラコチカルコ、アマケメカのように町ごとに分類しうる。  
 (46) BnF#74 はフォリオで表記されているが、『日記』などと比較しやすいようにページで示した。  
 (47) Castillo, *Estudio preliminar a la Octava Relación*, LII, LV. なお、ツィンメルマンは 1608 年から、ロメロ・ガルバンは 04 年から資料収集を始めたと考えている。  
 (48) 例えば、評価については『第三』(71v、78r)、『覚書』(37r、52v)、他資料との比較は『第七』(163r)、両論併記は『覚書』(48r~49r) など。  
 (49) 『第一』、『第二』はチマルパインの作品への導入部のようなもので、古典古代の著作や古代から中世の教父や神学者を多数引いている。これについては Messiaen や Elke Rufnau が詳しい。  
 (50) 拙稿「チマルパインと 1608 年」、pp.14~15。  
 (51) Castillo, *op. cit.*, LII, LV.  
 (52) Elizabeth Boone, *Stories in Red and Black*, pp.244~245.

## 参考文献

### 一次資料

*Anales de Tlatelolco*, paleografía y traducción por Rafael Tena, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes (以下、CONACULTA), México, 2004

Bibliothèque Nationale de France

----- *Differentes Histoire originales des Royaumes de Colhuacan de Mexico*, No.74, Source gallica.bnf.fr Département des Manuscrits

----- *Diario de Dn. Domingo de San Antón Muñón Chimalpahin*, No.220, Source gallica.bnf.fr Département des Manuscrits

Castillo, Cristóbal del, *Historia de la venida de los mexicanos y otros pueblos e Historia de la conquista*, traducción y estudio introductorio por Federico Navarrete Linares, CONACULTA, México 2001

Chimalpáhin, Domingo, *Las ocho relaciones y el Memorial de Colhuacan*, paleografía y traducción por Rafael Tena, CONACULTA, México, 2 vols., 1998

----- *Diario*, paleografía y traducción por Rafael Tena, CONACULTA, México, 2001

----- *Tres crónicas mexicanas Textos recopilados por Domingo Chimalpáhin*, paleografía y traducción por Rafael Tena, CONACULTA, México, 2012

Chimalpáhin Cuauhtlehuanitzin, *Octava Relación*, edición y versión castellana de José Rubén Romero Galván, Universidad Nacional Autónoma de México (以下、UNAM), México, 1983

----- *Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacan*, ed. de Víctor M. Castillo F., UNAM, México, 1991

----- *Primer Amoxtli Libro, 3ª Relación de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Víctor M. Castillo F., UNAM, México, 1997

----- *Primera, Segunda, Cuarta, Quinta y Sexta Relaciones de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Josefina García Quintana, Silvia Lemón, Miguel Pastrana y Víctor M. Castillo F., UNAM, México, 2003

----- *Séptima Relaciones de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Josefina García Quintana, UNAM, México, 2003

----- *Chimalpáhin y la conquista de México [La crónica de Francisco López de Gómara comentada por el historiador nahua]*, ed. Susan Schroeder, David Tavárez Bermúdez, Cristián Roa-de-La-Carrera, UNAM, México, 2012

Chimalpáhin Quauhtlehuanitzin, don Domingo de San Antón Muñón, *Annals of His Time*, edited and translated by James Lockhart, Susan Schroeder, and Doris Namala, Stanford University Press, 2006

----- *Codex Chimalpahin : Society and Politics in Mexico Tenochtitlan, Tlatelolco, Texcoco, Culhuacan, and Other Nahua Altepetl in Central Mexico*, 2 vols., ed. and trans. By Arthur J.

- O. Anderson and Susan Schroeder, University of Oklahoma Press, 1997  
*Códice Aubin [Códice de 1576]*, publicada por Antonio Peñafiel (1902) enriquecida con un suplemento de Alfredo Chavero, México, 1980  
----- Collection on line, The British Museum  
Losa, Francisco *Vida del sieruo de Dios Gregorio Lopez, 1727* (Biblioteca Nacional de España, Biblioteca Digital Hispánica)  
Martínez, Henrico *Reportorio de los tiempos e historia natural de esta Nueva España*, CONACULTA, México, 1991  
Suárez de Peralta, Juan, *Tratado del descubrimiento de las Indias*, CONACULTA, México, 1990  
Tezozomoc, Hernando de Alvarado, “Crónica mexicayotl” en *Tres crónicas mexicanas Textos recopilados por Domingo Chimalpáhin*, paleografía y traducción por Rafael Tena, CONACULTA, México, 2012  
----- *Crónica mexicana*, ed. de Gonzalo Díaz Migoyo y Germán Vázquez Chamorro, Madrid, 2000 ( ...?)  
Torquemada, Juan de *Monarquía Indiana*, 3 vols., Porrúa, 1975  
コルテス、エルナン (伊藤昌輝訳) 『コルテス報告書簡』 (法政大学出版局)、2015 年  
サアグン、バルナルディーノ・デ・(篠原愛人・染田秀藤訳) 『神々とのたたかい I』 (岩波書店)、1992 年  
ディアス・デル・カスティージョ、バルナール (小林一宏訳) 『メキシコ征服記 (一)~(三)』 (岩波書店)、1986~87 年

## 研究書

- Barlow, Robert H. La segunda parte del Códice Aubin (1520-1608) en *Obras de Robert H. Barlow*, vol.2, *Tlatelolco Fuentes e Historia*, INAH y UDLA, México, 1989  
Boone, Elizabeth Hill *Stories in Red and Black Ink Pictorial Histoires of the Aztecs and Mixtecs*, University of Texas Press, 2000  
Castañeda de la Paz, María “El Códice X o los anales del “Grupo de la Tira de la Peregrinación”; copias, duplicaciones y su uso por parte de los cronistas”, *Tlalocan* 15 (2008), p.183-214, México  
Castillo F., Víctor M., “Estudio Preliminar” al *Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacán*, UNAM, México, 1991  
----- “Estudio Preliminar” al *Primer Amoxtlí Libro: 3ª Relación de las Diferentes Histoires Originales*, UNAM, México, 1997  
Kruell, Gabriel Kenrick, “La Crónica mexicayotl: versiones coloniales de una tradición histórica mexica tenochca”, *Estudios de Cultura Náhuatl* (以下、ECN), #45(2013), p.197-232, México

- Lockhart, James, *The Nahuas After the Conquest A Social and Cultural History of the Indians of Central Mexico, Sixteenth Through Eighteenth Centuries*, Stanford University Press, 1992
- Lockhart, James, Frances Berdan and Arthur J. O. Anderson, *The Tlaxcalan Actas : A Compendium of the Records of the Cabildo of Tlaxcala (1545 - 1627)*, University of Utah Press, 1986
- Martínez Baracs, Rodrigo “El *Diario* de Chimalpáhin”, *ECN* #38, UNAM, 2007
- Messiaen, S.A.D. “Some interesting observations on Chimalpahin by us of his Diferentes Historias Originales”, *ECN* #34 (2003), p.219-256
- Romero Galván, José Rubén, Estudio, paleografía y versión a Chimalpain, *Octava Relación*, México, 1983
- Fernando de Alva Ixtlilxóchitl, en *Historiografía mexicana I*, UNAM, México, 2003
- Ruhnau, Elke “The First Relation of Chimalpahin’s *Diferentes Historias Originales*. Its sources and the authors & intention”, *Indiana*, 19/20, pp.277-287, 2002/2003, <http://www.iai.spk-berlin.de> (accessed on 11, August, 2018)
- Schroeder, Susan “Introduction” to *Annals of His Time*, edited and translated by James Lockhart, Susan Schroeder, and Doris Namala, Stanford University Press, 2006
- Tena, Rafael Presentación de *Diario* de Domingo Chimalpáhin, México, 2001
- 井上幸孝 「チマルパインの『日記』 『神戸市外国語大学研究科論集』 第六号 p.53-71、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科、2003
- 「クリオーリョという観点から見た先住民記録者アルバ・イシュトリルシヨチトル」 『紀要』 10号 p.27-41、京都ラテンアメリカ研究所 京都外国語大学 2010
- 岡崎勝世 『聖書 vs. 世界史 キリスト教的歴史観とは何か』 講談社現代新書、1996
- ザルノフスキー、ユルゲン 「病院修道会」 pp.237～252 P.ディンツェルバッハー・J.L.ホッグ[編] (朝倉文市[監訳]) 『修道院文化史事典』、八坂書房、2008
- 酒井真梨奈 「『コディセ=チマルパイン』第3巻巻頭文書に関する一考察」、撰南大学修士学位論文、2015
- 篠原愛人 「チマルパインと1608年」、『撰大人文学』第22号、pp.1～35、2014
- 「チマルパインと「クリオーリョ」」、同第23号、pp.1～24、2015
- 「チマルパインと「ドン」」、同第24号、pp.1～29、2016
- 「パリのチマルパイン」、同第25号、pp.1～29、2018
- 山崎眞次 『メキシコ:民族の誇りと闘い 多民族共存社会のナショナリズム形成史』、新評論、2004年
- ロペス=アウスティン、アルフレド (曾根尚子訳) 「海を越えてきたメシーカ人の歴史物語」 『季刊 iichico』 22、1992

### Summary

Here we try to clarify the writing sequence of Chimalpahin's main works, such as *Historical Retrospect* (*HR*, from now on), *Diary & Relaciones Históricas*, by comparing the latest dates, reference materials & common events treated in them.

Now we believe Chimalpahin began to write his 7<sup>th</sup> *Relación* in 1607 and not in 1629 and *HR* is his first work, even before *Diary* and the 7<sup>th</sup>. His first works *HR* and *Diary* are Aztec history from Tenochtitlan's point of view, because Chimalpahin was educated in Mexico City far from Chalco, his birthplace which he had left at 14. But in 1606, when his father, keeper of local history, died, he began to collect and copy historical documents of Chalco. Owing to these documents his views of himself and history changed. We find a turning point in *HR*, his own chronological table of world history and the beginning of his historical research. There is another watershed in his *Diary*; 4 articles in 1613 signed by don Domingo Chimalpahin, who had never referred to himself using that honorific title before.

We see the change in his historical writing, from Christian universal history and Aztec history, represented by *HR* and *Diary*, to history with plural points of view including that of his home town.